

# ブルーストの晴雨計人形

坂 本 浩 也

『失われた時を求めて』の愛読者がパリを訪れると、おそらくルーヴルやオルセー美術館に足を向け、ブルーストのお気に入りの絵画——シャルダンやモネ——を実際に眺めてみるにちがいない。しかし、いったい誰が、3区のレオミュール通りにある工芸博物館 (Musée des Arts et Métiers) を見学しようとするだろうか。ところが、そこには小説の重要な一節を思い起こさせる意外な品が所蔵されているのである<sup>1)</sup>。

まず、問題となる場面を確認しておこう。『囚われの女』の冒頭、朝の独特の感覚を描写するなかで、語り手は「小人」のメタファーを使いながら、「自我」の複数性という理論を展開する。われわれ個人の精神のなかには複数の小人がいる。そのなかで「いちばん目につくもの」がわれわれの「本質」をなしているわけではない、と語り手は述べる。これは、よく知られたサント＝ブーヴ批判の中心命題である「ふたつの自我」の理論、つまり社交の場で現れる表層的な自我と、芸術創造にかかわる深い真の自我の区別の発展形とも理解できる。しかし、一見すると芸術創造という使命よりも卑近な、天気への感性がクローズアップされる点が注目に値する。

私のなかで、病がそうした小人をひとりまたひとりと投げ倒してしまうときがきても、まだ二人か三人、ほかよりもしぶといものが残るだろう。とりわけどこか哲学者のような小人、ふたつの作品やふたつの感覚のあいだに共通点を発見したときにだけ幸福になる小人がいる。けれども、いちばん最後まで残るのは、コンブレーのメガネ屋が天気を告げるためにショーウィンドーに置いている小人によく似たやつなのではないかと思ったことがときどきある。日が差すとすぐに頭巾をとり、雨が降りそうになると頭巾をかぶりなおすあの人形である<sup>2)</sup>。

ここで喚起されているのは、小説第一篇第一部「コンブレー」のなか、

メゼグリーズのほうの散歩に際して、きわめてさりげなく描写される「カプチン会修道士」である。「ときにはメガネ屋のショーウィンドーに飾られたカプチン会修道士から警告されていたとおり、雨が降り出した」(I, p. 148). さて、まさにこの、修道士のかたちをした天気予報装置を思わせるものが、パリの工芸博物館には所蔵されているのである(図版).



図版「カプチン会修道士型の湿度計」P. Taburet © Météo-France

その正式名称は「カプチン会修道士型の湿度計」という。18世紀末に製造され、1807年から1814年ごろにコレクション入りしたらしい(分類番号1546)。「大気を測定する」と題したヴァーチャル展覧会に出品されたときの紹介文では、こう説明されていた。「頭巾につながった管のなかに、こよりをつかった湿度計が挿入されている。装置に貼られた説明書によると、『カプチン会修道士が完全に頭巾をとっているときは、“晴れて寒

いか空気が乾燥している”を意味し、半分しか頭巾をとっていないときは、“変わりやすい天気”を意味し、頭巾をかぶっているときは、“雨”を意味する』<sup>3)</sup>。

さきで引用するとおり、小説では「湿度計 hygromètre」ではなく「晴雨計（気圧計）baromètre」という語が用いられているが、この説明書の記述はブルーストの文章に見事に一致する。一種の科学玩具と呼んでもよいのだろうか、このような素朴なオブジェは、19世紀のフランスにかなり普及していたと想像できる。工芸博物館の所蔵品は、もともと物理学者ジャック・シャルル（1746-1823）の研究室にあったものらしい<sup>4)</sup>。サイズは高さ26.6センチ、直径6.5センチ、重さ210グラム。オリジナルの部品から復元したものなのか、頭巾を動かすメカニズムが欠けているため、残念ながら実際には作動しないという。

科学を応用したユーモラスなこの人形仕掛けは、ブルーストの小説世界においてきわめて象徴的な位置を占めると同時に、彼の思想の核を比喩的に表現している。そもそもこのカプチン会修道士の比喩が、『失われた時を求めて』の前段階である「サント＝ブーヴに反論する」の草稿ノートにすでに登場することは示唆的である（III, p. 1101）。なにより、本論の冒頭に引用した『囚われの女』の一節を読めば、この修道士になぞらえられる「気象的な自我」が、「哲学者」的な自我よりも「本質的」だとされていることの重要性は明かだろう<sup>5)</sup>。なにしろ「ふたつの作品やふたつの感覚のあいだに共通点を発見」するとは、小説最終篇『見出された時』で提示されるブルーストの美学の中核をなす要素にほかならない。無意志的記憶（過去と現在に共通する感覚の啓示）、メタファー（異質な対象に共通する感覚の表現）、ヴィジョン（同一の芸術家の異なる作品に共通するテーマやモチーフの存在）といったキーワードは、いずれも「異なるもののあいだの共通点の認識」という表現に集約されうる。それにもかかわらず、哲学者的な自我よりも気象的な自我のほうが本質的であり、「私」の生命と密接に結びついていると語り手はいう。そのことはなにを意味するのか。この天気を告げる小人の比喩は、いったいどのような思想を暗示しているのか。

まず確認しておくべきなのは、ブルーストがこの人形のイメージを、作品全体にはりめぐらされた意味の編み目のなかに巧みに組み込んでいることだ。小説『失われた時を求めて』には、天気にかんする記述が無数にふくまれている<sup>6)</sup>。ここで想起されるのは、主人公の父の晴雨計への過剰な

思い入れと、そのユーモラスな描写である。父が晴雨計をじっくりと眺める様子を、母は黙ってうやうやしく見守る (I, p. 11)。しかし晴雨計の予測がはずれ、父が驚くさまが、ギャグとして反復される。たとえば息子をたずねてきた友人ブロックへのこんな台詞がある。「ところでブロックさん、いったいどんな天気ですか、雨が降ったのですか、まったく理解できない、晴雨計は最高だったのに」 (I, p. 91)。祖母の臨終をめぐる悲痛なエピソードのかたすみでは、主人公のいところが、「今朝コンブレーから受けとった手紙によるとあちらはひどい天気なのですが、こちらは日差しが暑すぎますね」というと、父が「でも晴雨計はとても低いですよ」と答える (III, p. 637)<sup>7)</sup>。

このふたつの晴雨計、コンブレーでなんども描かれる父の愛用品（ほかにも I, p. 163, p. 385 を参照）と、めだたないメガネ屋の展示物とが、『囚われの女』のなか、先ほど引用した一節の 50 ページほど先で結びつくことになる。そこで語り手は、じぶんのなかに親類の「魂が転生している」のを認める。具体例としては、レオニー叔母、母、祖母、そして気象学を愛好した父の名前があがる。「私は極端なまでに父に似ていたせいで、父のように晴雨計を確かめるだけではすまず、私自身が生きた晴雨計になってしまったのだった」 (III, p. 586)。

『失われた時を求めて』のなかでは、最初は離ればなれだったものが最後にはかならず結びつく。その小説構成の原理がここでも作用している。コンブレーのメガネ屋の人形のおかげで、主人公は父の晴雨計を象徴的に継承すると言ってよいだろう。とはいえ、問題の晴雨計とは、家父長の優越性を科学的に証明する小道具ではない。そもそも晴雨計へのほとんど宗教的な——その意味で逆説的な——信仰は、ほほえましい、ほとんど子どもじみた盲信として揶揄され、父の権威は相対化されていたのだから<sup>8)</sup>。それでは主人公「私」が「生きた晴雨計になってしまう」とは、どのような意味なのか。

最初に引用した『囚われの女』の一節のつづきをここで検討してみよう。カプチン会修道士に重ねられる主人公の気象的な自我は、「間歇的な小人」とも呼ばれていた (III, p. 519)。つねにあらわれているわけではなく、気候の変化に応じて表面化する存在である。

この小人、私は彼の利己心を知っている。私が呼吸困難の発作に襲われていて、ただ雨さえ降ってくれば発作がおさまるようなときでも、彼のほうはお

かまいなしに、待望の雨粒が落ちはじめのやいなや陽気を失い、不機嫌に頭巾をかぶってしまう。そのかわりに、きっと私が臨終の床に就いて、ほかの「自我」がすべて死んでしまったときでも、ひとすじの陽光が差し込んでくれば、私の息が絶えようとするなか、晴雨計の小人はすっかりいい気分になって、頭巾をとって歌いだすにちがいない。「ああ、やっと晴れた」と (III, p. 522)。

父の癖を継承したというだけでは、この一節の複雑なイメージは説明できない。父の関心をひいていたのは、天候をめぐる予測と現実の一致（または不一致）であり、気象にたいする感性は、いわば外部の器具に委託されていたにすぎないからだ。ところがこの場面では、メガネ屋の店先のガラスのなかに閉じ込められた人形のイメージが、主人公の状況（かつてのレオニー叔母に似て、パリの自室に閉じこもりきりの状態）に重ねられるだけでなく、主人公の精神のなかにいて間歇的にあらわれる小人、気候の変化に「利己的に」反応する小人にも重ねられている。主人公は、祖母のように風雨に肌をさらして自然の力を直接享受することはできないが (I, p. 11)、いっさい器具に頼ることなく（ここが父との違いである）、いわば自動的に、外界の天気ほとんど感知できないような微細な兆候——「街路の物音」や「いくらかの発散物」(III, p. 519)——を解読する力を身につけていて、その力がここで素朴に動く修道士のフィギュアによって擬人化されているのだ<sup>9)</sup>。

晴雨計の人形は、「コンブレー」で描かれたときにはたいした意味のない写実的な物語の細部に見えたが、再登場にあたってはレトリック用語で「比較対象」と呼ばれるもの（比喩の一部をなす想像の対象）になる（「雪のように白い肌」というときの雪は肌の比較対象である）。ブルーストは、気候の変化を感じとる「自我」という理論的な構築物を表現するために、その具体的な「小人」のイメージを見事に活用している。この複雑な比喩のたぐいまれな力は、ほかでもなく、瀕死の「私」（肉体）にたいする「自我」（精神）の無関心を、悲喜劇的に演出する点にある。「私」個人の心のなかに、「私」の意識にさからう他者性が秘められていること（「小人」の「利己心」）。この洞察は、技術をめぐる想像力と結びついている。問題となるのは、無意識である。というのも、自動人形の比喩は、まさに人間の精神の一部が自律性をもち、理性と意識の制御をのがれ、機械のように自動的に外界の変化（ここでは気象の変化）に反応することを示唆するから

だ。

要するに、修道士の姿をした晴雨計は、気候への感受性と無意識という、作中で反復される重要なふたつのモチーフを体現する存在である。天候は、時系列の論理をのがれる間歇的な時間性をもつ点でも、プルーストの小説の本質につながっている。また、そもそも晴雨計とは、人間が明確には知覚できない（意識できない、サブリミナルな）大気の兆候を、目に見える記号、知的に理解可能な記号に「翻訳」する装置にほかならない。プルーストにとって、小説とは、文学とは、そのような営みではなかったか。『見出された時』の最後に語り手は自問する——「記憶によって印象を再創造し、つづいて深化し、解明し、知的な等価物に妥容させること、それこそが、芸術作品の条件のひとつであり、ほとんど本質でさえあるのではないか」（IV, p. 621）。こうしてみると、『失われた時を求めて』のなかでコンブレーのメガネ屋にかざられた修道士の人形がもつにいたった象徴的な位置の大きさに納得がいくのである。

#### 注

- 1) 本稿は、かつてフランス語で発表した小論（Hiroya Sakamoto, « À propos du “petit personnage barométrique” », *Bulletin Marcel Proust*, n° 55, 2005, p. 21-26）を日本語に訳し、若干の加筆修正をほどこしたものである。プルーストの小説における電話の主題を修士論文でとりあげたあと、博士論文で同時代のほかの技術メディアの主題についても研究しようとパリに留学した際、最初に訪れた工芸博物館で、私は偶然この素朴な所蔵品を目にした。探していないものを見つけるセレンディピティの歓びを味わうだけで満足し、論文にしようとは考えもしなかったが、数年後べつの偶然によって、近代テキスト草稿研究所のセミナー中の雑談でこのオブジェを話題にしたところ、ナタリー・モーリアック研究主任に論文執筆を勧められたのだった。幸いにも論文はイタリア語にも訳された（« A proposito del “petit personnage barométrique” », trad. Giuseppe Girimonti Greco, *Quaderni Proustiani*, Associazione Amici di Marcel Proust, Napoli, n° 4, 2007, p. 97-102）。のみならず吉川一義先生の新訳プルーストにて図版とともに紹介していただいた（『失われた時を求めて』岩波文庫、第1巻、2010年、327ページ、図26）。10年前の論考ながら、日本語に訳すことにいくらかの意味があると考えた次第である。
- 2) Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., 1987-1989, t. III, p. 522. これ以降『失われた時を求めて』およびその草稿などを参照する場合は、この版に依拠し、括弧のなかに巻とページを示す。

- 3) [http://files.meteofrance.com/files/institutionnel/cnam/fr/rub\\_1.htm](http://files.meteofrance.com/files/institutionnel/cnam/fr/rub_1.htm)  
(2016年1月10日閲覧)「半分しか頭巾をかぶっていない」と訳した箇所  
の原文は« s'il n'est pas [sic] qu'à moitié découvert »となっている。以下も参  
照。J.-P. Javelle, M. Rochas, C. Pastre, M. Hontarrède, M. Beaurepaire  
et B. Jacomy, *La Météorologie, du baromètre au satellite ; mesurer  
l'atmosphère et prévoir le temps*, Lausanne et Paris, Delachaux et Niestlé,  
2000, p. 51.
- 4) <http://cugnot.cnam.fr:8000/BASIS/collec/internet/objet/SF>より検索  
(2016年1月10日閲覧)
- 5) 「気象的な自我」をめぐる歴史家アラン・コルバンの解説については、『空と  
海』小倉孝誠訳、藤原書店、2007年、36ページ以下を参照。哲学的な自我  
や気象的な自我のほかに、もっとはかないものとして、いわば「恋する自我」  
があり、こちらは愛する対象に無関心になれば死滅する (IV, p. 615)。
- 6) 主要な先行研究をあげておく。Pierre Dufour, « Marcel Proust et la  
météorologie », *Revue de l'Université de Bruxelles*, tome III (1950-1951),  
p. 340-348 (cité par Roland Barthes dans *La Préparation du roman I et II,  
Cours et séminaires au Collège de France (1978-1979 et 1979-1980)*, éd.  
Nathalie Léger, Seuil/IMEC, 2003, p. 68 et 78) ; Bertrand de Toffol,  
« Proust et le temps qu'il fait : un point de vue atmosphérique », *Bulletin  
d'informations proustiennes*, n° 22, 1991, p. 83-97 ; Jean-Pierre Richard,  
« Proust météo », *Amicitia Scriptor, Littérature, Histoire des idées,  
Philosophie, Mélanges offerts à Robert Mauzi*, textes réunis par A. Becq,  
Ch. Porset et A. Mothu, Honoré Champion, 1998, p. 327-334.
- 7) 父の晴雨計への過剰な信頼は滑稽で、祖母の臨終という文脈を考えると、い  
ささか場違いにすら見えるが、じつはおなじ場面で長々と描かれるもうひとつ  
べつの、目に見えないものを測る装置、体温計と対をなしているとも言える。  
ブルーストは体温計を、つぎからつぎへと超自然的な存在や道具——「銀のサ  
ラマンダー」、「ちいさな魔女のホロスコープ」、「ちいさな巫女」、「ちいさな女  
預言者」、「運命の女神」——になぞらえる (III, p. 595-596)。気象学に関心  
をしめす語り手の父の姿は、ブルースト自身の父をモデルにしている。母から  
の1896年10月23日の手紙にはこんな一節がある。「お父様から昨日、パル  
ヴィル [天気予報についての記事の作者] を八段も読ませられました。それで  
学んだのは、天気が悪いときはいつでも、なにか理由があるということど  
す！」 Marcel Proust, *Correspondance*, éd. Ph. Kolb, Plon, 21 vol., t. II,  
1976, p. 151-152.
- 8) おなじように家父長の幼児性を描いた作品として、ヴァージニア・ウルフの  
『灯台へ』を読むこともできる。ブルデューの分析を参照。Pierre Bourdieu,

*La domination masculine*, Seuil, « Points essais », 2002 [1998], p. 98-112.

- 9) 「ああ、やっと晴れた Ah ! enfin, il fait beau」という台詞は、ベートーヴェンのオペラ『フィデリオ』を下敷きにした（とプルーストが考えていた）ドビュッシーの『ペレアスとメリザンド』のなかの言葉、「ああ、やっと息がでる Ah ! je respire enfin !...」と関連づけて解釈することもできる（III, p. 208, n. 4 参照）。これはにわか雨に白髪を濡らしながらコンプレーの庭を歩き回る祖母の台詞（Enfin, on respire !）とも重なる（I, p. 11）。『囚われの女』の冒頭では、語り手は逆に自身の「息が絶え」ようとするなか、内なる気象的な自我が晴天に歓喜するという皮肉な乖離の場면을想像しているのである。